

論 文

現実的な配偶者の決定要因*

～結婚候補者の存在確率に関する定量的評価～

鈴木 亘、八代 尚宏**

＜要旨＞

本稿は、代表性のある大規模な独身者アンケートをもとに、そのデータセット自体を疑似的な結婚市場と見做し、結婚候補者とのマッチング状況、ミスマッチの発生状況を定量的に把握した。具体的には、アンケート調査で尋ねた各個人の「結婚相手に求める条件」

（年齢、年収、雇用形態、学歴、身長、体型の6条件）を用いて、①その条件を全て満たす異性が結婚市場内にどれぐらいいるのか（希望率）、②自身の条件が異性の条件を満たしている割合はどの程度なのか（人気率）、③自身の条件を満たす異性がいて、その異性の条件を自身が満たしている割合はどれぐらいなのか（成立率）という3つのマッチング指標を算出し、分析を行った。

その結果、結婚市場全体の成立率は3.8%と、極めて狭き門であることがわかった。男女どちらかの希望があるにもかかわらず結婚候補者のマッチングが成立していないミスマッチ率は、実に42.0%にも上る。また、女性の希望率13.3%に対し、男性の希望率は32.5%であり、女性の方が結婚市場のマッチングにおいて交渉力が強いことが伺える。さらに、年齢、年収、雇用形態、学歴、身長、体型別に、3つのマッチング指標の集計結果を観察した。高年齢、低学歴、非正規、低身長、肥満など、自身が持つ属性の市場価値が低く、人気率が低い場合には、留保条件を下げて希望率を高め、不人気を補おうとする行動が確認できる。もっとも、マッチングの成立率を上げる余地はまだ十分にあると考えられる。現実には、結婚市場の情報を個人で入手しづらい状況を考えると、行政が本稿のようなマッチング指標を独身者に提供することにより、マッチングの効率性が高まることが期待される。

JEL Classification Codes : D13, D91, J12

Keywords : 結婚市場、婚活、マッチング

* 少子化・女性活躍の経済学研究プロジェクトのメンバーからは数多くの有益なコメントをいただいた。感謝を申し上げたい。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

** 鈴木 亘：学習院大学 経済学部 教授、八代 尚宏：昭和女子大学 現代ビジネス研究所 特命教授。

『経済分析』掲載論文は、すべて執筆者個人の見解としてその責任において執筆されており、執筆者の所属機関や内閣府及び経済社会総合研究所の公式見解を示すものではない。

Spouse Selection in Japan: How Realistic Are Spouse Selection Criteria in the Marriage Market?

By Wataru SUZUKI and Naohiro YASHIRO

Abstract

This paper quantitatively examines the matching of potential marriage partners and the occurrence of mismatches in the Japanese marriage market using a large-scale survey of singles conducted by the Cabinet Office. The survey asked respondents about six criteria for selecting a marriage partner: age, annual income, employment status, educational attainment, height, and body size.

We then calculate the rate of potential candidates meeting a respondent's criteria (match rate), the likelihood that a respondent meets the criteria of others (market desirability), and the probability that the criteria of both sides coincide (mutual match rate).

The analysis revealed that the mutual match rate in the Japanese marriage market is 3.8%, which is very low, while the mismatch rate is 42.0%. In addition, women have more bargaining power in the marriage market, with a 32.5% market desirability compared to a 13.3% match rate. Matching efficiency could improve if the Japanese government provided Japanese singles with this information on the Japanese marriage market.

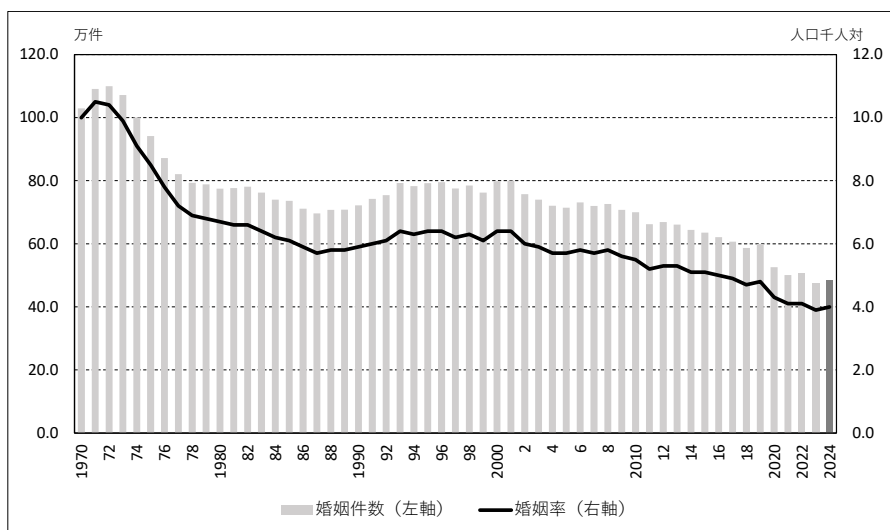
JEL Classification Codes: D13, D91, J12

Keywords: marriage market, spouse choice, matching

1. はじめに

我が国の結婚するカップルの数が、減少トレンドにある。2024 年の婚姻件数は 48 万 5,092 組と、前年より若干回復しているものの、5 年前 (2019 年) の 59 万 9,007 組と比較すると、10 万組以上の減少となっている。人口対比の婚姻率 (千人比) も 4.0 と、5 年前の 4.8 から大幅に低下している (厚生労働省 (2025))。2000 年代初めから婚姻件数、婚姻率ともに低下トレンドにあるが、2020 年から始まったコロナ禍により、さらに大きな落ち込みとなっていることがわかる (図 1)。この落ち込みはコロナ禍の終息とともに回復するという楽観論が一部にあったが、新型コロナウイルスの 5 類移行後も回復の兆しが顕著にはみられていない。我が国は、非嫡出子の数が少なく、結婚しないと出産を行わない傾向が強いため、婚姻数の減少はダイレクトに少子化に結び付く。地方自治体のみならず、国の施策としても、婚活支援など、結婚市場のマッチング対策に本腰を入れることが期待される。

図 1 婚姻件数と婚姻率の推移



注) 厚生労働省「人口動態統計」(各年版) より。

さて、経済学分野では、結婚相手を探す行動 (配偶者選択) に関し、ジョブサーチモデルを応用したメイトサーチモデルが想定されることが多い (Ermisch (2003)、橘木・木村 (2008))。メイトサーチモデルでは、人々が結婚市場に参入するにあたって、一定の留保条件を設定し、その水準以上の条件を持つ候補者が現れた時に、結婚の決断を行うとされる。ただし、結婚は相手とのマッチング行動であるから、片方だけが結婚の決断をしても意味がない。双方とも、相手が自身の留保条件を上回るとみなすことができた場合にのみ、結婚のマッチングが成立する。したがって、人々の留保条件がどのように設定されているのかということが、結婚市場のマッチングにおいて、極めて重要なファクターである。

一般に、留保条件があまり高く設定されているのはマッチングが難しくなる。成婚を望むのであれば、結婚市場の需給状況を見極め、自分の市場価値に見合う程度の留保条件を設定することが肝要である。しかしながら、留保条件には結婚の機会費用が反映される側面があるため、しばしば高学歴、高所得の女性に見られるように、自分と同等以上の学歴、所得の男性という結婚市場において極めて希少な相手を求めてしまい、ミスマッチとなることが起こり得る。また、結婚市場全体の情報は個人では入手しづらいことから、特に結婚市場に参入したての若者において、自分の市場価値がわからず、高すぎる留保条件を設定しているケースもみられる。もっとも、後者の場合は、結婚市場におけるサーチャージ（交際経験）の蓄積と共に、留保条件が現実的に修正されることが期待できるが、コロナ禍のようなショックが起き、交際自体が困難になると、ミスマッチはなかなか解消されないことになる。

本稿は、大規模な独身者のアンケートをもとに、そのデータセット自体を疑似的な結婚市場と見做し、結婚候補者のマッチングの成立状況やミスマッチの発生状況を定量的に把握するものである。具体的には、人々の留保条件を、アンケート調査における「結婚相手に求める条件」と見做し、①その条件を満たす異性が結婚市場内にどれぐらいいるのか（希望率）、②逆に、自身の属性が異性の条件を満たしている割合はどの程度なのか（人気率）、③自身の条件を満たす異性がいて、その異性の条件を自身の属性が満たしている割合はどれぐらいなのか（成立率）、結婚市場の客観的状況を把握する。結婚市場のマッチング、ミスマッチに関して、このようなアプローチを行った研究は筆者の知る限り存在していないが、水落（2010）がやや近いかもしれない。無論、女性が結婚相手として求めている高所得の男性の数が少ないといったミスマッチ現象を指摘した研究はこれまでもあった（加藤（2004）、山田（2007））。また、水落（2010）は、経済産業省の「結婚相談・結婚情報サービスに関する調査」の独身者データをもとに、その定量化を試みている。具体的には、未婚女性が結婚相手に求める年収条件のアンケート結果をもとに、その年収条件を満たす男性を収入合格者と定義し、地域ごとの「収入合格率」を計算した。その結果、収入合格率は、中部地方で高く、北海道・東北で低いことなどを明らかにしている。また、地域ごとの収入合格率を説明変数にして、有配偶確率の回帰分析を行った結果、その地域の収入合格率が高い程、有配偶率を押し上げる効果があることを報告している。本稿は、水落（2010）が行った結婚相手の条件をマッチング指標化するというコンセプトをさらに押し進め、より多元的に精緻化した研究と位置づけられよう¹。

以下、本稿の構成は下記の通りである。2節では本稿で用いるデータについて解説し、3節では、結婚相手に求める条件について、男女別の特徴を確認する。4節で、本稿が考案した分析手法を解説した上で、5節でその分析結果を示す。6節は結語である。

¹ なお、経済学におけるマーケットデザイン、マッチング理論を利用し、結婚相談所やマッチングアプリのデータを用いて、マッチングプロセスの分析する研究も数多い（Hitsch et al. (2010)、Galichon and Salanié (2022) など）。本稿の分析は、マーケットデザイン、マッチング理論は無関係であり、マッチングの概念も、これらとは異なることに注意されたい。

2. データ

本稿で用いるデータは、内閣府経済社会総合研究所が 2024 年 3 月に実施したアンケート調査（少子化・女性活躍の経済学研究調査）である。この調査の内容については、鈴木・小島（2024）に詳しいが、調査会社の大規模モニターサンプルの中から、全国の 25 歳から 49 歳の対象者を抽出し、インターネットでアンケートを実施している。本稿はそのうち、独身者の男女、1 万サンプルを用いる（男性 5,103、女性 4,897）。調査は、2023 年 1 月 1 日現在の住民基本台帳人口を用いて、都道府県別×男女別×年齢 5 歳階級別の目標回収数を母数割合に等しくなるように割り付け、その目標数を満たすように回収期間を設定した。注意しなければならないのは、住民基本台帳人口は独身者と既婚者が区別できないため、独身者も総数（既婚者と独身者の合計）と同じように母数割合が割り付けられていることである。このため、例えば、未婚率の低い 40 歳代の独身者は、実際の数よりも多く割り振られている一方、未婚率の高い 20 歳代の独身者は、実際の数よりも少なくなる（表 1）。この点を修正するために、分析の際には、2020 年の国勢調査の都道府県別×男女別×年齢階級別の未婚率を用いて、サンプリング・ウェイトを修正した集計を行っている。

このデータでは、結婚相手に求める条件も詳細に尋ねている。具体的には、①年齢、②年収、③雇用形態、④学歴、⑤身長、⑥体型の 6 条件について、下記の質問項目がある²。

Q1 あなたが、結婚相手（事実婚の場合はパートナー）に求める年齢条件はどのようなものですか。全く気にしない場合には「全く気にしない(全て許容)」を選んでください。そうではない場合にはあなたが許容できる条件をすべてお選びください。（回答はいくつでも）

- | | | | |
|----------------------|------------|------------|------------|
| 1. 全く気にしない（全て許容）（排他） | | | |
| 2. 18～19 歳 | 3. 20～24 歳 | 4. 25～29 歳 | 5. 30～34 歳 |
| 6. 35～39 歳 | 7. 40～44 歳 | 8. 45～49 歳 | 9. 50 歳代以上 |

Q2 あなたが、結婚相手（事実婚の場合はパートナー）に求める年収条件はどのようなものですか。全く気にしない場合には「全く気にしない(全て許容)」を選んでください。そうではない場合にはあなたが許容できる条件をすべてお選びください。（回答はいくつでも）

² この他に、相手に求める家事能力も詳細に尋ねているが、そこまでのマッチングを求めると極めて厳しい条件になるため、本稿では家事に関する条件は用いていない。また、分析対象として、結婚を希望していると回答した人に限定することも考え得る。しかし、結婚を希望していないと回答した人が、本当に結婚を希望していないのか、それとも、自身の条件から結婚できる可能性が低いと考え、結婚を希望していないと答えたのかを区別できないため、本稿では全ての人々を分析対象にしている。

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1. 全く気にしない（全て許容）（排他） | |
| 2. 100 万円未満 | 3. 100 万円～300 万円未満 |
| 4. 300 万円～500 万円未満 | 5. 500 万円～700 万円未満 |
| 6. 700 万円～1,000 万円未満 | 7. 1,000 万円以上 |

Q3 あなたが、結婚相手（事実婚の場合はパートナー）に求める就業の条件はどのようなものですか。全く気にしない場合には「全く気にしない（全て許容）」を選んでください。そうではない場合にはあなたが許容できる条件をすべてお選びください。（回答はいくつでも）

- | | | |
|----------------------------|---------------|---------------|
| 1. 全く気にしない（全て許容）（排他） | | |
| 2. 正規社員 | 3. パート・アルバイト | 4. 派遣・嘱託・契約社員 |
| 5. 個人業務請負・フリーランス・ギグワーカー・内職 | 6. 自営業主・家族従業者 | |
| 7. 日雇い | 8. 無職・家事 | 9. 学生 |

注：「個人業務請負」は、個人事業主として企業と業務請負契約を結び、仕事をする場合を指しています。

Q4 あなたが、結婚相手（事実婚の場合はパートナー）に求める学歴の条件はどのようなものですか。全く気にしない場合には「全く気にしない（全て許容）」を選んでください。そうではない場合にはあなたが許容できる条件をすべてお選びください。（回答はいくつでも）

- | | | |
|----------------------|-------|---------------|
| 1. 全く気にしない（全て許容）（排他） | | |
| 2. 中卒（高校中退を含む） | 3. 高卒 | 4. 専門学校・専修学校卒 |
| 5. 短大・高専卒 | 6. 大卒 | 7. 大学院卒 |

Q5 あなたが、結婚相手（事実婚の場合はパートナー）に求める身長条件はどのようなものですか。全く気にしない場合には「全く気にしない（全て許容）」を選んでください。そうではない場合にはあなたが許容できる条件をすべてお選びください。（回答はいくつでも）

- | | | | |
|----------------------|--------------|---------|--------------|
| 1. 全く気にしない（全て許容）（排他） | | | |
| 2. 低い | 3. 平均よりもやや低い | 4. 平均程度 | 5. 平均よりもやや高い |
| 6. 高い | | | |

Q6 あなたが、結婚相手（事実婚の場合はパートナー）に求める体型の条件はどのようなものですか。全く気にしない場合には「全く気にしない（全て許容）」を選んでください

い。そうではない場合にはあなたが許容できる条件をすべてお選びください。(回答はいくつでも)

- | | | | |
|----------------------|---------|-------|-------|
| 1. 全く気にしない（全て許容）（排他） | | | |
| 2. 肥満 | 3. 太り気味 | 4. 普通 | 5. 細め |
| 6. 痩せている | | | |

それぞれ、「全く気にしない（全て許容）」という選択肢があることに特徴がある。「全く気にしない(全て許容)」と回答した場合にはそれ以外の回答はできない質問になっている。一方、それ以外の回答は複数回答になっており、柔軟に選好を捉えられるようにしている。これらの諸条件に対して、対応する個人属性が表1の記述統計となっている。

表1 記述統計

	女性		男性	
	平均値（割合）	標準偏差	平均値（割合）	標準偏差
25～29歳	0.169	0.375	0.173	0.378
30～34歳	0.173	0.378	0.174	0.379
35～39歳	0.194	0.395	0.193	0.395
40～44歳	0.213	0.410	0.211	0.408
45～49歳	0.202	0.401	0.190	0.393
100万円未満	0.134	0.341	0.106	0.308
100万円～300万円未満	0.326	0.469	0.207	0.405
300万円～500万円未満	0.283	0.451	0.334	0.472
500万円～700万円未満	0.096	0.294	0.147	0.354
700万円～1,000万円未満	0.028	0.166	0.053	0.225
1,000万円以上	0.132	0.339	0.152	0.359
正規社員	0.528	0.499	0.595	0.491
パート・アルバイト	0.161	0.368	0.098	0.298
派遣・嘱託・契約社員	0.125	0.330	0.071	0.256
個人業務請負・フリー・ギグ・内職	0.039	0.194	0.044	0.206
自営業主・家族従業者	0.022	0.147	0.058	0.234
日雇い	0.001	0.025	0.002	0.044
無職・家事	0.116	0.320	0.125	0.331
学生	0.008	0.088	0.007	0.083
中卒（含む高校中退）	0.024	0.153	0.038	0.192
高卒	0.219	0.414	0.249	0.432
専門学校	0.170	0.376	0.128	0.334
短大・高専	0.134	0.341	0.025	0.155
大卒	0.412	0.492	0.473	0.499
大学院卒	0.040	0.197	0.088	0.283
身長低い	0.144	0.352	0.103	0.304
身長平均よりもやや低い	0.190	0.392	0.204	0.403
身長平均程度	0.406	0.491	0.438	0.496
身長平均よりもやや高い	0.204	0.403	0.173	0.379
身長高い	0.056	0.230	0.081	0.273
体型肥満	0.076	0.266	0.084	0.278
体型太り気味	0.226	0.418	0.227	0.419
体型普通	0.465	0.499	0.447	0.497
体型細め	0.158	0.364	0.165	0.372
体型痩せ	0.075	0.264	0.076	0.265

注) サンプルデータの記述統計であり、集計に当たってサンプリング・ウェイトは修正していない。

3. 留保条件の男女比較

前節の結婚相手に求める条件（留保条件）について、男女別にその特徴を見てゆこう。

まず、図2は年齢についてであるが、男女差が顕著である。男性は若い女性を結婚候補者として求めており、特に20歳代後半、30歳代前半の希望が多い。男性に比較すると、女性はやや年齢の高い男性を求めている。男女とも相手に求める年齢層がやや高く感じられるのは、25歳以上にサンプルを限定しているためである。図3、図4はそれぞれ年収と雇用形態である。女性は、男性に対して高い年収を求める傾向があるが、500万円～700万円未満の階層が最も多く、それ以上は希望割合が下がっており、やや現実的な側面が伺える。これに対して、男性は女性の年収を全く気にしない割合が高く、希望していたとしても、それほど高い年収を求めているわけではない。雇用形態についても男女差は明確である。女性は男性に対して正社員であることを強く求めている一方、男性は女性の雇用形態を気にしない割合が高い。希望する場合には、正社員を求める割合がやや高いが、他の雇用形態に比べて突出しているほどではない。図5は学歴である。女性は男性に大卒以上の学歴を求める割合が顕著に高い。男性は女性の学歴を気にしない割合が高く、希望する場合でも学歴間の希望割合にそれほど大きな差異はない。図6、7はそれぞれ身長と体型である。女性は男性に平均以上の身長を求める割合が高いが、男性は女性の身長を気にしない割合が高い。もっとも、体型についてのみは、男性も大いに気にしており、普通か細めの女性を求めている。この点は女性も同様であり、両性とも相手の肥満を顕著に嫌っていることがわかる。

図2 相手に求める条件1（年齢）

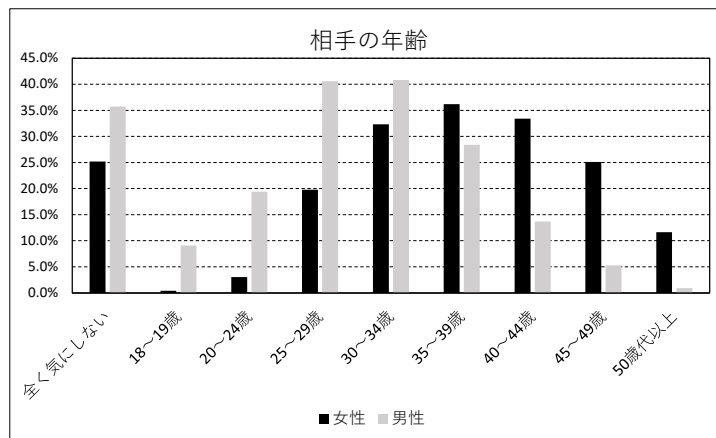


図3 相手に求める条件2（年収）

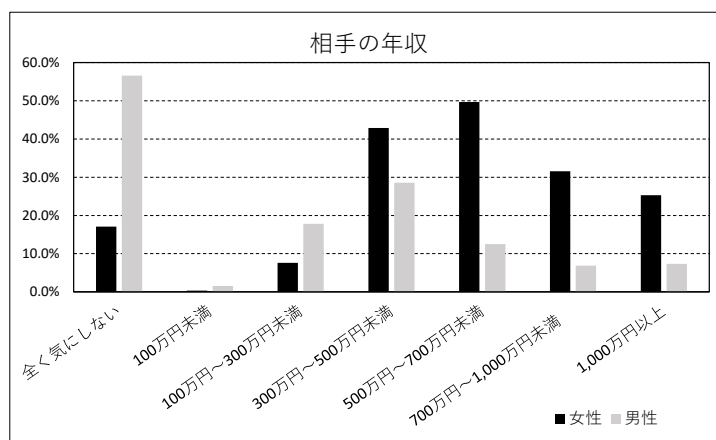


図4 相手に求める条件3（雇用形態）

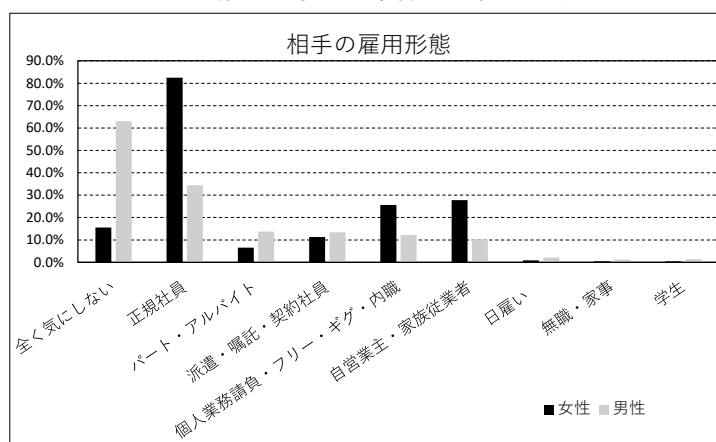


図5 相手に求める条件4（学歴）

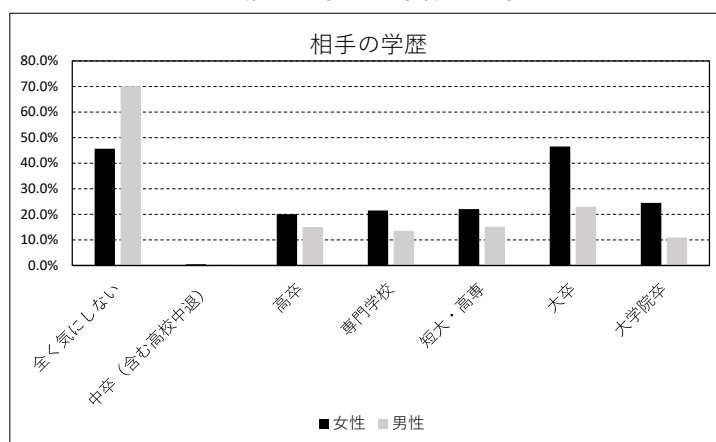


図6 相手に求める条件5（身長）

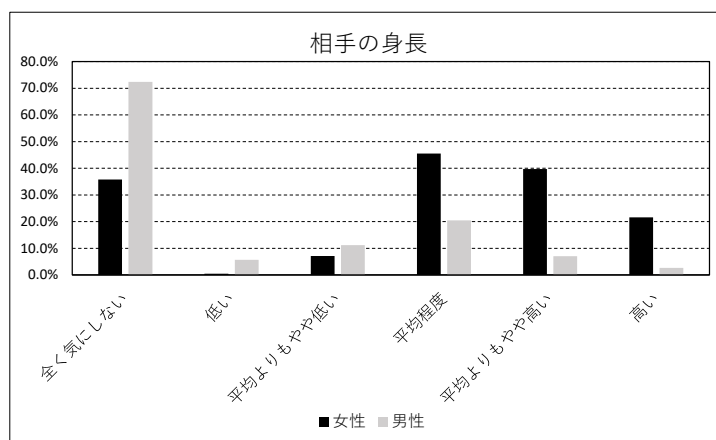
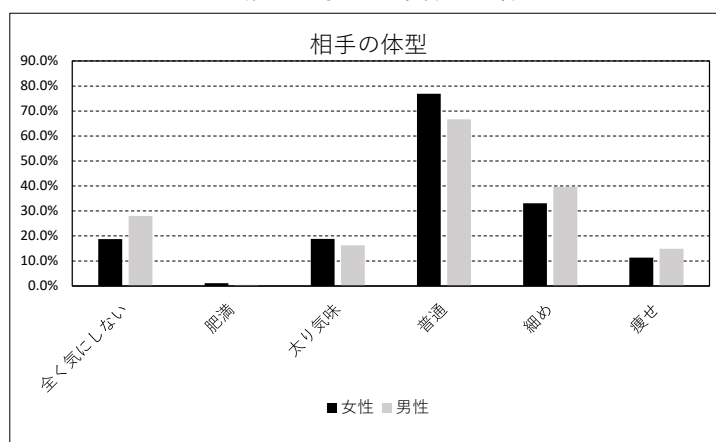


図7 相手に求める条件6（体型）



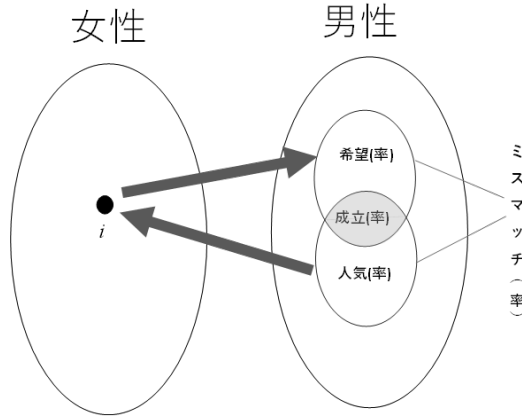
4. 分析手法

本稿では、結婚市場のマッチング状況に関する3つの指標を次のように定義する。

- 1) 希望率 (K_i) …自身の条件を満たす異性が結婚市場にいる割合。留保条件を下げて結婚相手の候補対象を広げるほど高い率になるので、結婚という財に対する自身のいわば「需要」を示す。
- 2) 人気率 (N_i) …自身の属性が、異性が求める条件を満たしている割合。自分を結婚相手の対象者とみる異性がたくさんいるほど高い率となるので、いわば結婚財の「供給」を示す。
- 3) 成立率 (M_i) …自分の条件を満たす異性がいて、その異性の条件を自分が満たす割合。結婚候補者としてマッチングしているので、結婚市場のいわば「均衡」を示す。それぞれ個人 i について定義される。女性の個人 i からみた、各指標の概念図は図8の

通りである。 $K_i + N_i - M_i$ は、男性もしくは女性から希望があるにもかかわらず、マッチングが成立しなかったという意味で、ミスマッチ率と言うことができる。

図 8 マッチング指標の概念図



それぞれのマッチング指標を数式で表すと下記のようなになる。

$$K_i = \frac{\sum_j \prod_k \theta_k^i(i, j)}{m}$$

$$N_i = \frac{\sum_j \prod_k \phi_k^j(j, i)}{m}$$

$$M_i = \frac{\sum_j \prod_k \theta_k^i(i, j) \cdot \phi_k^j(j, i)}{m}$$

ここで、 i は結婚市場内にいる同性の個人番号、 j は異性の個人番号である。 k は結婚相手に求める条件で、1 から 6 までである。 $\theta_k^i(i, j)$ は、個人 i における結婚相手の条件を表す指示関数 (indicator function) で、個人 i の k 番目の条件を異性 j が満たす場合に 1、満たさない場合に 0 となる。これが 6 つの条件 (k) の全ての指示関数の積の形となっているので、1 から 6 までの全ての項目で条件を満たす場合にのみ 1、それ以外が 0 になる。これを異性全てに対して足し上げて、異性の合計数 m で除したものが、希望率 K_i である。同様に、 $\phi_k^j(j, i)$ は、異性の個人 j における結婚相手の条件を表す指示関数で、個人 j の k 番目の条件を個人 i が満たす場合に 1、満たさない場合に 0 となる。この 6 つの条件の指示関数の積を異性全てに対して足し上げて、異性の合計数 m で除したものが、人気率 K_i である。成立率 K_i については、 $\theta_k^i(i, j)$ と $\phi_k^j(j, i)$ の積の形になっているので、個人 j が個人 i の

条件 k を全て満たした上で、個人 i が個人 j の条件 k を全て満たす場合にのみ 1、それ以外に 0 となる。それを 6 つの条件全ての積にした上で、 j について足し上げ、 m で除したものを成立率と定義する。それぞれの平均値は、サンプリングバイアスを修正するウェイト w_i 、および同性の合計数 n を用いて次のように計算する。

$$\bar{K} = \frac{\sum_i K_i \cdot w_i}{n}$$

$$\bar{N} = \frac{\sum_i N_i \cdot w_i}{n}$$

$$\bar{M} = \frac{\sum_i M_i \cdot w_i}{n}$$

5. 分析結果

5.1 全体の集計結果

まず、各マッチング指標について、結婚市場全体の状況をまとめたものが表 2 の一番左の欄の「全体」である。マクロ的には、「女性の希望率＝男性の人気率（女性の人気率＝男性の希望率）」なので、女性から見た指標のみを提示している³。まず驚かされるのは、結婚候補者としてのマッチング成立率がわずか 3.8% と、極めて狭き門であることである。男女どちらかの希望があるにもかかわらず、候補者としてのマッチングが成立していないミスマッチ率（ $K+N-M$ ）は、実に 42.0% にも上る。本稿が用いている 6 つの条件は、結婚相手に求める条件としてごく普通のものであるが、それでも全ての条件を満たす相手を選ぼうとすると、候補者は極めて限られることがわかる。もちろん、この 6 つの条件以外に、容姿、性格や趣味と言った要素も結婚の条件として重要であるし、逆に、6 つの条件をすべて満たさなくても、現実には妥協することもあるので、この成立率やミスマッチ率は十分に幅をもって見なければならない。

また、女性の希望率が 13.3% であるのに対し、女性の人気率（男性の希望率）はその約 2.5 倍の 32.5% であるから、男性よりも女性の方が結婚市場のマッチングにおいて交渉力が強いことが伺える。実際、男女に分けてマッチング指標の相関を取ると（表 3）、女性の希望率と成立率の相関は 0.92 と極めて高く、男性の 0.74 を上回る。つまり、女性の需要によって、マッチングが決まりやすい状況であると考えられる。女性の男性に対する要求水準の方が男性よりも高いことには、どのような背景があるのだろうか。平均的には、男性

³ 実際には、男女の総数が若干異なることやサンプリングバイアスを修正するためのウェイトの関係で、希望率と人気率は男女差がわずかに存在する。

の方が年齢・年収・学歴などが高いことから、女性にとっての結婚は、男性と同じ経済水準に達するための手段としての上方婚（hypergamy）という側面がある。このため、女性の方が男性よりも相手を吟味している可能性がある。一方、男性にとっては、女性の年収や雇用状態、学歴などはどちらかと言えば副次的な要素であり、それよりも優しさや育児・家事能力など、数値化されにくい要因を重視している可能性もある。

ちなみに、表 2 の「全体」以外の各項目は、6 条件全てではなく、個別の条件を 1 つずつ使ってマッチング指標を計算したものである。例えば、「年齢のみ」の欄は、結婚相手の条件として、年齢のみを唯一の条件として各マッチング指標を計算している。これをみると、成立率が一番低いのは、年収の 29.2%であり、次いで年齢の 35.8%と、年収と年齢が他の項目よりもやや厳しい制約になっていることがわかる。ただ、どれか一つの条件が、3.8%という厳しい成立率の決定的要因となっているようには見えない。やはり、6 つそれぞれの条件が重なり合うことで、3.8%という狭き門を作り出しているといえる。

少子化対策と言う意味では、20 歳代や 30 歳代前半の女性のマッチング状況がより重要である。表 4 の「35 歳までの女性」欄は、25 歳から 35 歳の女性に限定して各マッチング指標を集計したものである。これをみると、成立率は全体よりも高く、6.2%となっているが、やはり狭き門であることには変わりはない。年齢が若いこともあり、女性の人気率は 58.0%という高い率になるが、女性の希望率は 18.9%と、人気率の約 3 分の 1 に止まる。このため、ミスマッチ率は 70.8%とかなり高くなっている。少子化対策としては、この年齢層の女性のミスマッチをいかに減らすかということが、特に重要なテーマとなる。女性にとっても、男性の優しさや育児・家事能力など、数値化されにくい要因は重要であり、内藤・八代（2025）が詳しく分析しているように、それを検証するための結婚前同棲の機会、希望率の引き上げを可能にするためにも重要な要素と言えよう（八代（1993））。

表 2 全体の集計結果

	全体	年齢のみ	年収のみ	雇用形態のみ	学歴のみ	身長のみ	体型のみ
(1) 女性の希望率（男性の人気率）	13.3%	52.9%	43.1%	70.0%	78.0%	65.1%	64.0%
(2) 女性の人気率（男性の希望率）	32.5%	63.2%	71.0%	85.4%	87.1%	84.4%	70.4%
(3) 成立率（男女同じ）	3.8%	35.8%	29.2%	58.7%	68.1%	55.1%	44.0%
(4) ミスマッチ率（(1) + (2) - (3)）	42.0%	80.3%	84.8%	96.7%	97.0%	94.4%	90.4%

表 3 相関図

女性

	人気率	希望率	成立率
人気率	1.00		
希望率	0.18	1.00	
成立率	0.30	0.92	1.00

男性

	人気率	希望率	成立率
人気率	1.00		
希望率	-0.04	1.00	
成立率	0.38	0.74	1.00

表 4 35 歳以下の女性の集計結果

	35歳までの女性	全体（再掲）
(1) 女性の希望率（男性の人気率）	18.9%	13.3%
(2) 女性の人気率（男性の希望率）	58.0%	32.5%
(3) 成立率（男女同じ）	6.2%	3.8%
(4) ミスマッチ率（(1) + (2) - (3)）	70.8%	42.0%

表 5 条件を 1 つ減らしたケースの集計結果

	条件を1つ減らす ケース(全体)	全体（再掲）
(1) 女性の希望率（男性の人気率）	33.1%	13.3%
(2) 女性の人気率（男性の希望率）	60.5%	32.5%
(3) 成立率（男女同じ）	18.8%	3.8%
(4) ミスマッチ率（(1) + (2) - (3)）	74.8%	42.0%

5.2 項目別の集計結果（女性）

次に、年齢、年収、雇用形態、学歴、身長、体型という 6 項目について、各マッチング指標を見てゆこう。女性についての集計結果が、図 9 から図 14 に示されている⁴。

⁴ この項目別の集計結果は、回帰分析ではなく、属性別にデータを輪切りにしているだけなので、他の属性要素も影響していることに注意されたい。

まず、図 9 の年齢別の集計をみると、年齢が高まるほど、全ての指標が低くなってゆく傾向が明瞭である。女性は 30 歳代に入ると、人気率が驚くほど急激に低下してゆくが、希望率も同時に下がってしまっている。この背景には、自らの年齢や所得水準の上昇で候補者の対象範囲が縮小することや、キャリアに伴う女性の機会費用上昇や、婚活に投じたサunkコストの回収を願う心理（行動経済学で言う「サunkコストの誤謬」）が働いているものと思われる。しかし、結婚市場でのマッチングを本気で望むのであれば、もっと留保条件を下げ、むしろ希望率を上げるぐらいの努力が必要となる。一方、40 歳代に入ると、希望率はほぼ横ばいをキープしており、人気率と希望率の差は小さくなる。30 歳代よりはやや現実的となり、機会費用やサunkコストが上昇しても、希望率を下げずに結婚相手の対象を狭めないように努力をしているとみることができる。もっとも、希望率が上昇することもないので、条件（留保水準）を下げてまで無理に結婚したくないという居直りの心理が働いているともみることができよう。

図 10 は年収別にみたものであるが、まず、成立率と希望率の相関が高いことがわかる。年収 300 万円～500 万円未満までは年収が高まるほど人気率が高まるが、それを超えると、逆に年収が高い程、人気率が減少している。この背景には、年収と連動して女性の年齢が高まっていることがあると思われる。また、女性の年収が高いほど、希望率が減少してゆくのは、結婚の機会費用仮説やサunkコストの誤謬仮説と整合的と言えよう。ただ、1,000 万円以上になるとむしろ留保条件を下げて希望率を高め、結婚候補の対象を広げている点が興味深い。これぐらい自分の年収が高い層になると、家族の生活を支えるには十分であり、対象者が少なくなる上方婚をあきらめ、現実的な判断を行うということなのかもしれない。

図 11 の雇用形態別にみても、成立率と希望率の相関が高い。女性ではあっても、正社員の人気率がやや高いが、非正規に比べてそれほど大きな差があるわけではない。非正規や無職・家事の希望率が高いことは、結婚のリスク分散機能という保険仮説と整合的である（Becker (1973)）。一方、学生の人気率が特に高い背景は、年齢が若いことがあるものと思われる。

図 12 は学歴別にみたものであるが、やはり成立率と希望率の相関が高い。全体として学歴別の成立率に大きな差異はない。女性ではあっても、大卒、大学院卒の人気率がやや高いことは、男女共同参画社会の進展を感じさせるものである。一方、中卒、高卒の成立率が高いことは、人気率の低さを補うために、留保条件を下げ、希望率を高くしていることが影響しているものとみられる。また、中卒、高卒の希望率が高いことは、結婚の保険仮説とも整合的である。

身長別にみたものが図 13 である。やはり成立率は希望率と相関が高いようにみえる。人気率が、「平均よりやや低い」身長で最も高くなっている点は、いかにも日本的と言える。成立率は「低い」がやや高くなっているが、これも自身の市場価値の不利をよく理解し、留保条件を下げて、結婚相手の対象を広げていることが原因であろう。

図 14 は、体型別にみたものである。体型についてのみは、希望率よりも人気率と成立率の相関が高くなっている。肥満の人気率は極めて低いが、その割に成立率がそれほど低くならないのは、肥満者が自身の市場価値の低さをよく理解し、結婚相手の対象を広げて、希望率を高くしているためと考えられる。

図 9 年齢別のマッチング指標（女性）

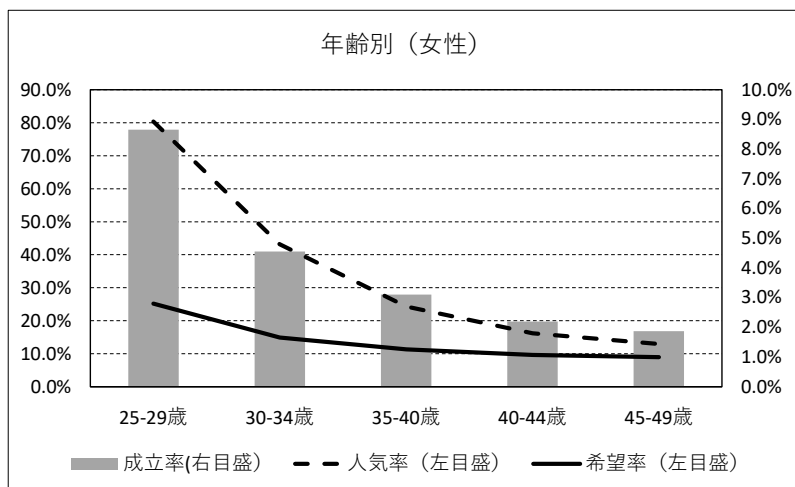


図 10 年収別のマッチング指標（女性）

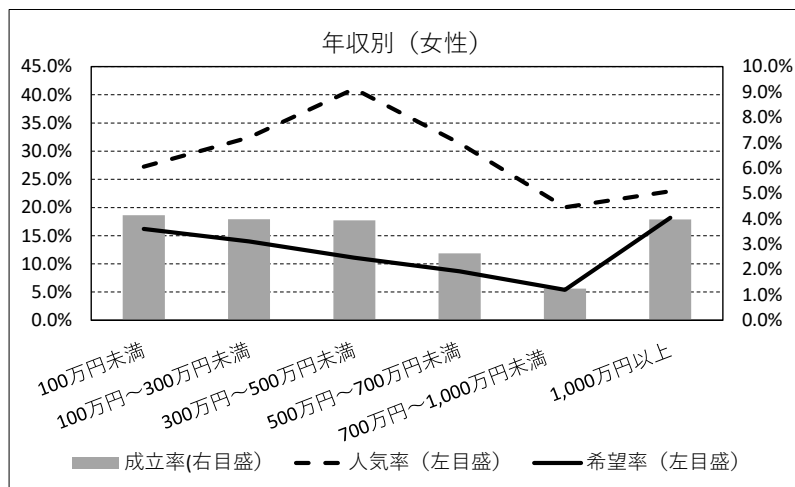


図 11 雇用形態別のマッチング指標（女性）

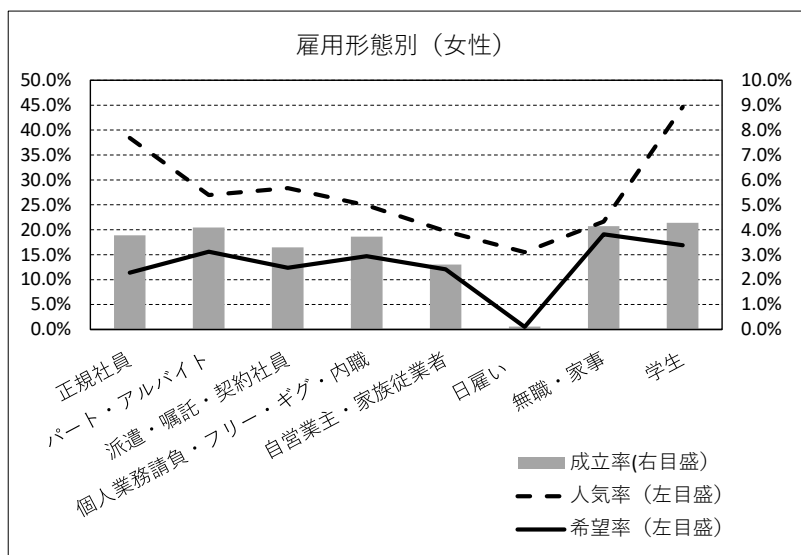


図 12 学歴別のマッチング指標（女性）

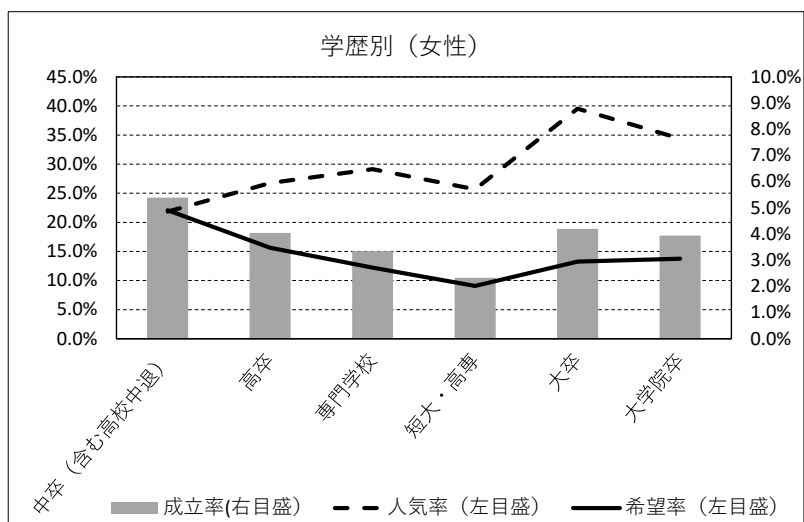


図 13 身長別のマッチング指標（女性）

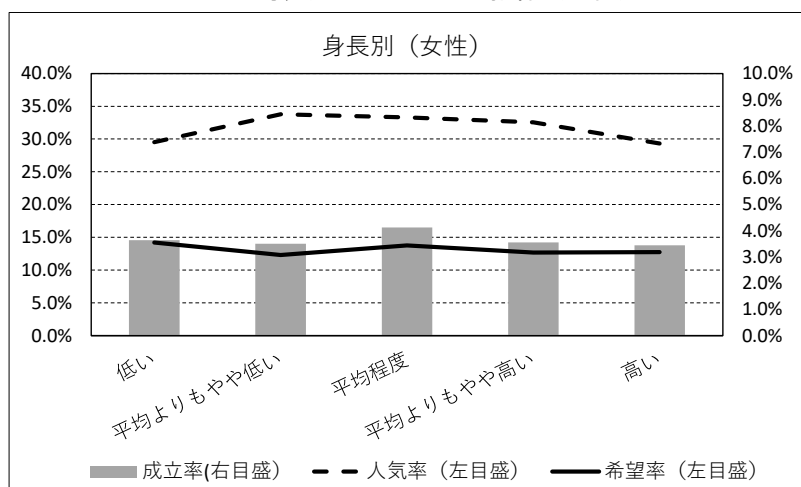
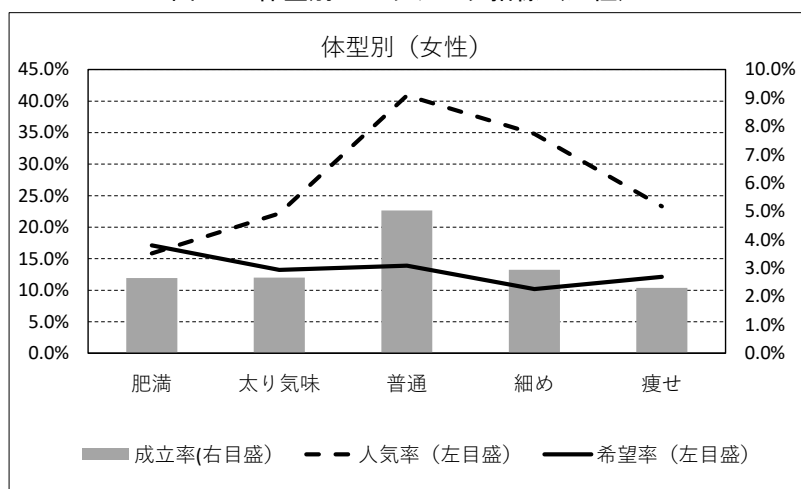


図 14 体型別のマッチング指標（女性）



5.3 項目別の集計結果（男性）

図 15 から図 20 は、男性についての項目別の集計結果である。

まず、図 15 の年齢別の集計をみると、年齢が高まるほど、成立率は低くなるが、年齢の高い層で減少幅は小さくなり、下げ止まってきている。これは、35 歳以上で人気率が低下する中で、希望率を下げずに一定をキープして、人気率の減少を補っていることが背景と思われる。つまり、35 歳以上の男性は、自身の市場価値の低下をよく認識して、留保条件を下げ、結婚候補の対象者を広く保とうと努力していることが伺える。もっとも希望率が上がることもないので、一生独身で良いというあきらめの心理もあるのかもしれない。

図 16 は、年収別にみたものである。成立率は人気率（女性の希望率）との相関が高く、やはり、女性の需要がマッチングにとってより重要であることがわかる。年収の低い層は

人気率も低い、意外にも 500 万円以上～700 万円未満でピークを付けた後、700 万円以上の年収層から人気率は低下している。これは、図 3 でみた女性の現実的な選好の他、高所得の男性の年齢が高くなっていることが背景にあるものと考えられる。

雇用形態別の図 17 をみても、やはり成立率と人気率の相関が高い。正社員の人気率が高く、その結果として、希望率が低いにもかかわらず、成立率が高くなっている。その他の雇用形態は、日雇いや無職・家事の成立率が低いことを除けば、それほど大きな差異はない。学生の成立率がやや高いのは、大学という男女間の平等性の高い“職種”であることなどが影響しているものと思われる。

図 18 は、学歴別にみたものである。やはり、成立率は人気率との相関が高い。学歴が高いほど、人気率が高く、その結果として成立率が高くなっている。ただ、学歴が低いほど自身の市場価値の低さをよく認識して、留保条件を下げて結婚候補の希望対象を広げていることが伺える。その結果として、人気率が低い割には、低学歴者の成立率は下がってはいない。

身長別にみたものが図 19 であり、成立率と人気率の相関がやはり高い。女性とは異なり、身長が低いよりも高い方が人気率、成立率ともに高くなっている。ただ、身長の低い男性は自身の市場価値の低さをよく認識し、希望率を高くして結婚候補の対象を広げており、その結果として、成立率の低下がやや緩和されている。

図 20 は体型別にみたものである。体型についても、成立率と人気率の相関が高い。女性同様、太め目よりもやせ型の方が人気率、成立率が高い。ただ、肥満、太り気味の男性は、ここでも自身の市場価値の低さをよく認識し、留保条件を下げて結婚候補の希望対象を広げている様子であり、その分、成立率の低下が緩和されている。

図 15 年齢別のマッチング指標（男性）

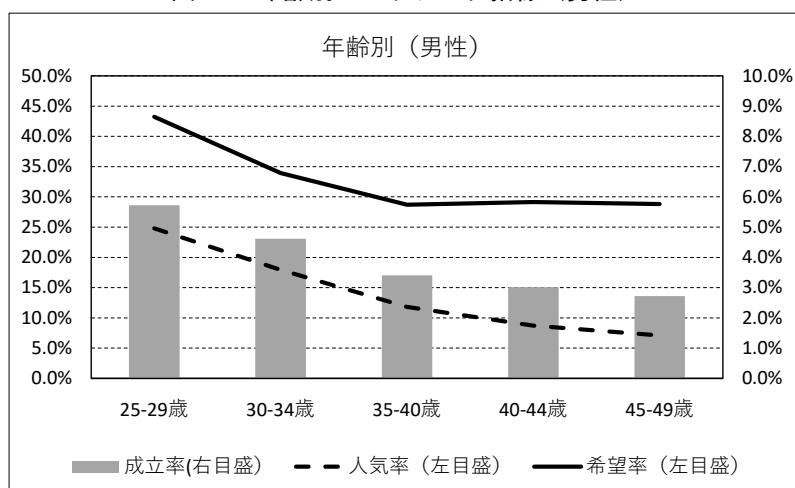


図 16 年収別のマッチング指標（男性）

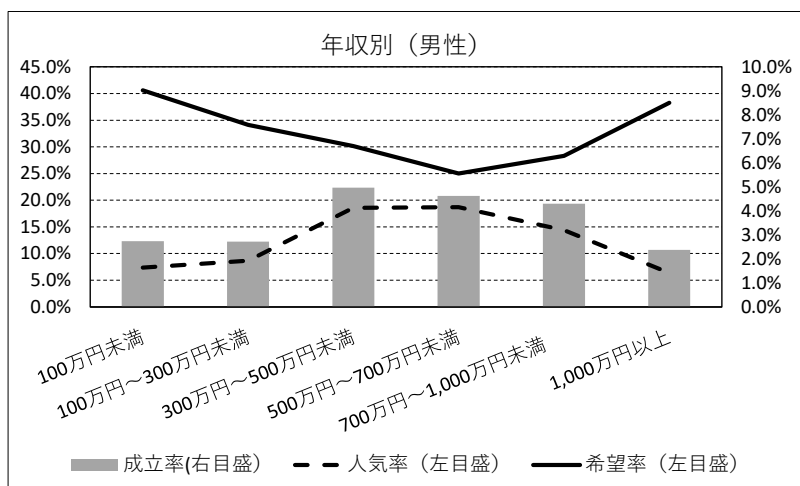


図 17 雇用形態別のマッチング指標（男性）

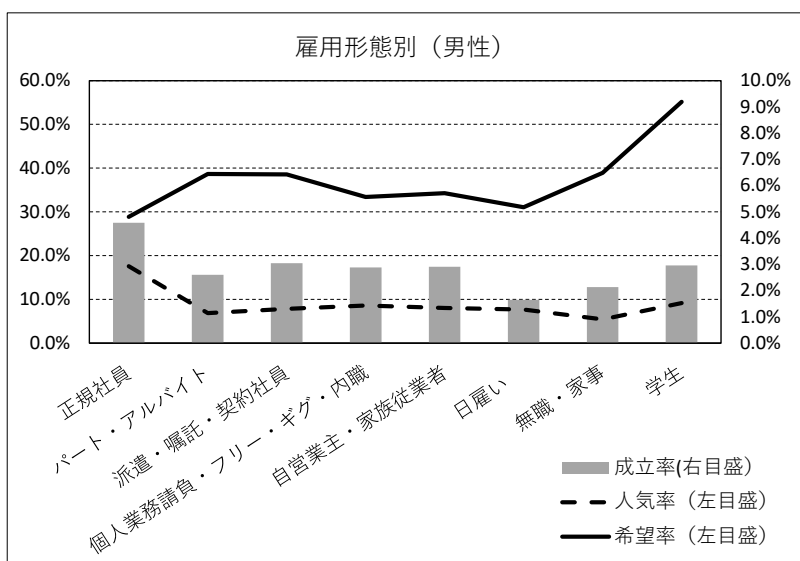


図 18 学歴別のマッチング指標（男性）

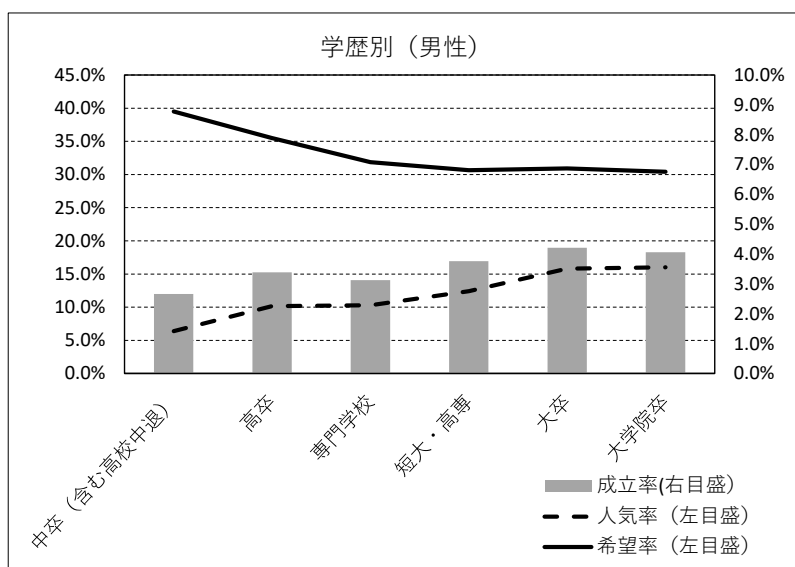


図 19 身長別のマッチング指標（男性）

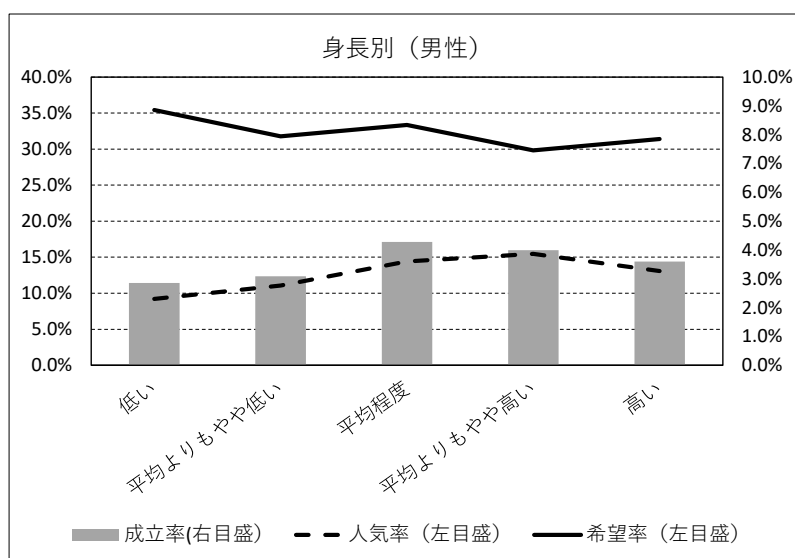
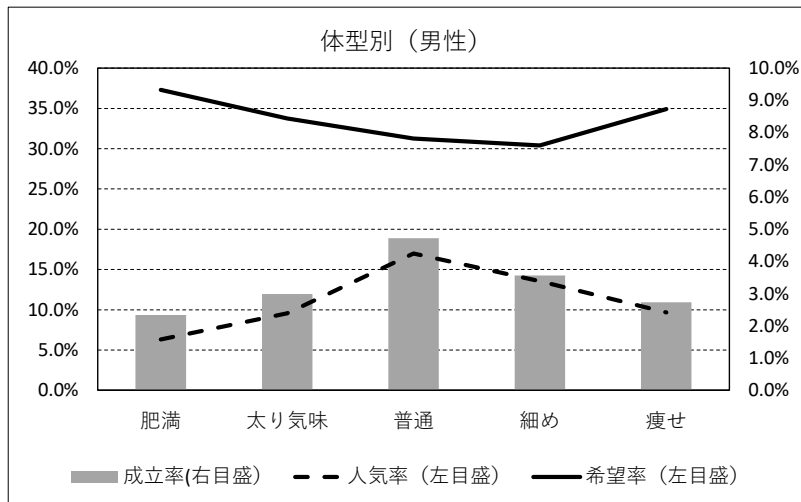


図 20 体型別のマッチング指標（男性）



6. 結語

本稿は、代表性のある大規模な独身者アンケートをもとに、そのデータセット自体を疑似的な結婚市場と見做し、結婚候補者とのマッチング状況、ミスマッチの発生状況を定量的に把握した。具体的には、アンケート調査で尋ねた各個人の「結婚相手に求める条件」

（年齢、年収、雇用形態、学歴、身長、体型の6条件）を用いて、①その条件を全て満たす異性が結婚市場内にどれぐらいいるのか（希望率）、②自身の条件が異性の条件を満たしている割合はどの程度なのか（人気率）、③自身の条件を満たす異性がいいて、その異性の条件を自身の属性が満たしている割合はどれぐらいなのか（成立率）という3つのマッチング指標を算出し、若干の分析を行った。

その結果、結婚市場全体の成立率は3.8%と、極めて狭き門であることがわかった。男女どちらかの希望があるにもかかわらずマッチングが成立していないミスマッチ率は、実に42.0%にも上る。また、女性の希望率13.3%に対し、女性の人気率（男性の希望率）は32.5%であり、女性の方が結婚市場のマッチングにおいて交渉力が強いことが伺える。また、このことは女性の方が結婚相手への条件が厳しく、マッチングの制約となっていることも意味する。

さらに、年齢、年収、雇用状態、学歴、身長、体型別に、3つのマッチング指標の集計結果を観察した。高年齢、低学歴、非正規、低身長、肥満など、自身が持つ属性の市場価値が低く、人気率が低い場合には、留保条件を下げて希望率を高め、不人気を補おうとする行動がある程度確認できる。留保条件を一種の価格と考えれば、まさに結婚市場の需給に応じた価格調整が、一定程度、機能していることがわかる。ただし、例えば、30歳代の女性のように、加齢とともに人気率が急激に低下する中で、希望率も一緒に低下させると

いう“市場原理”に反するケースもある。機会費用の上昇やサunkコストに見合う成果を求める心理（サunkコストの誤謬）がその背景にあると思われる。もし、自分の市場価値の低下を冷静に見極め、思い切って留保条件が下げることができたならば、もっと高い成立率になることであろう。

その他のケースでも、留保条件を市場の需給に合わせて適切に設定すれば、成立率を高める余地があることが確認できる。特に、男性よりも、結婚相手への条件が厳しい女性について、このことが当てはまる。もちろん、自身の市場価値の低下をよく認識した上で、それでも合理的判断として留保条件を下げないのであれば、それは個人の意思の問題なので、政府が政策として関与すべきことではない。しかし、自身の市場価値について十分に情報が入手できていなかったり、自信過剰バイアスなどの行動経済学的な要因が、留保条件を適正に設定することを妨げているのであれば、政策的な介入によって、マッチングの効率性が高められる余地がある。

ところで、結婚相談所のカウンセラーたちによる婚活のノウハウに関する書物を読むと、マッチング成功の秘訣として共通して書かれていることは、一刻も早く現実を知って、結婚相手への高すぎる条件を引き下げた方が良いということである（橋本(2020)、三島(2021)、植草(2022)、大屋・現代(2022)、石坂(2023)）。そのためには、自分が相手に求める条件だけではなく、自分が相手の条件を満たすかどうかを冷静に考えることが勧められている。結婚相談の現場においても、このようなノウハウが強調されていることを考えると、独身者たちの留保条件は決して全てが合理的なものではなく、適切なアドバイスや情報提供によって変わり得るものなのであろう。ちなみに、表5は6つの条件全てではなく、1つ条件を落として、5つの条件さえ満たせばよいとした場合に、マッチング指標がどう変化するかを見たものである。女性の希望率や人気率は約2倍に増加し、成立率は3.8%から一気に18.8%に急拡大する⁵。

しかし、現実問題として、結婚市場における自分の市場価値を客観的に把握することは、個人にとってはかなりハードルの高いことである。マッチングアプリを用いたり、結婚相談所に入会するなどして、交際や見合いなどの経験を重ねれば、その対価としてある程度、結婚市場の情報が入手できるかもしれない。あるいは恋愛市場で豊富な交際経験を持つことでも情報は蓄積されるだろう。そして、そのような情報の蓄積とともに、自信過剰バイアスなども修正されると思われる。

もっとも、コロナ禍以降、男女の交際機会が社会的に減少しており、結婚相談所を利用することにも多額の費用がかかる。こうした中では、本稿のようなマッチング指標を行政が作って、独身者に情報提供することが社会的に必要となるだろう。例えば、政府の「地域少子化対策重点推進交付金」を用いて、いくつかの自治体で行われているマッチング事

⁵ やや拡大幅が大きいように思われるが、妥協として重要性の低い条件を1つだけあきらめるのではなく、年齢や年収など、重要な条件が落とされている場合もあることに注意されたい。また、両性双方とも、1つ条件を落としてお互いに歩み寄っていることが、拡大幅が大きくなる要因であろう。

業や、東京都が 2024 年から行っている AI マッチングシステム「TOKYO 縁結び」事業などにおいて、地域ごとにデータを集め、個人属性ごとに本論文の手法に沿った希望率、人気率、成立率、ミスマッチ率などの結婚市場の情報が提供されれば、マッチングの効率性が高まることが期待できる。また、その結婚市場の情報は、やはり、「地域少子化対策重点推進交付金」を用いて行われている婚活支援コンシェルジュ、伴走型結婚支援を行う際にも、大いに役立つだろう。

参考文献

- 石坂茂 (2023), 『プロの仲人が伝授! : 90 日後にプロポーズされる賢い婚活』 幻冬舎.
- 植草美幸 (2022), 『結婚の技術』 中央公論新社.
- 大屋優子・現代洋子 (2022), 『余計なお世話いたします : 半年以内に結婚できる 20 のルール』 集英社.
- 加藤彰彦 (2004), 「未婚化・晩婚化と社会経済的状況」 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編 『現代家族の構造と変容: 全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』 東京大学出版会, 45-58 頁.
- 厚生労働省 (2025), 「令和 6 年 (2023) 人口動態統計 (確定数) の概況」.
- 鈴木亘・小島宗一郎 (2024), 「独身者データと既婚者の振り返りデータを用いた結婚の決定要因に関する経済分析」 『日本労働研究雑誌』 No. 768, 35- 52 頁.
- 橘木俊詔・木村匡子 (2008), 『家族の経済学 : お金と絆のせめぎあい』 NTT 出版.
- 内藤朋枝・八代尚宏 (2025), 「結婚前同棲関係が結婚行動に及ぼす影響の経済分析」 『経済分析』 第 211 号, 165-197 頁.
- 橋本きよみ (2020), 『大人の婚活 : 結婚で幸せになれる人の賢い選択』 きずな出版.
- 三島光世 (2021), 『婚活は「がんばらないほうが」 うまくいく : 大切なご縁を最速で形にする成婚塾』 秀和システム.
- 水落正明 (2010), 「第 7 章 男性に求められる経済力と結婚」 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲 (2010) 『結婚の壁 : 非婚・晩婚の構造』 勁草書房, 129-143 頁.
- 八代尚宏 (1993), 『結婚の経済学 : 結婚とは人生における最大の投資』 二見書房.
- 山田昌弘 (2007), 『少子化日本 : もうひとつの格差のゆくえ』 岩波書店.
- Becker, Gary (1973). “A theory of marriage Part I.” *Journal of Political Economy*, 81, 813-846.
- Ermisch, John (2003). *An Economic Analysis of the Family*. Princeton University Press, Princeton.
- Hitsch, Gunter J., Ali Hortaçsu and Dan Ariely (2010). “Matching and sorting in online dating.” *American Economic Review*, 100(1), 130-163.
- Galichon, Alfred, and Bernard Salanié (2022). “Cupid’s Invisible Hand: Social surplus and identification in matching models.” *The Review of Economic Studies*, 89(5), 2600-2629.